

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2024. 11. 9.

文責／JUN

子どもがみつける学びの素晴らしさ

1 子どもが「学びの主人公」になるとは

経済協力開発機構（OECD）のプロジェクトにおいて「学びの羅針盤」（ラーニング・コンパス 2030）という提言が出され、その中の「生徒エージェンシー」という言葉が注目されている。その言葉について、佐藤学先生（東京大学名誉教授）は、拙著『「学び合う学びを生きる～“まなざし”と“内省的実践がつくる授業”」（ぎょうせい）の「解説」において、日本語に翻訳するのは困難だが、学ぶ子どもを表す言葉として佐藤先生ご自身が表現しておられる「学びの主人公」あるいは「学びの主権者」とほぼ同等の意味と言ってよいだろうと述べておられる。

これまで日本の学校教育において行なわれていたのは、どちらかと言うと「教師に教えられる学習」だった。だから、授業研究と言えば、発問はどうあるべきかといった教師の指導法に偏っていたように思う。それでは、ある意味、授業の主人公を教師にできてしまっていたとも言える。そういう教育のあり方がいま、見直されようとしているのだ。

では、子どもが「学びの主人公」になるとは、どういう状態になることなのだろう。もしかすると、そのイメージは教師によってさまざまなものかもしれない。ただ、「学びの」という言葉がつけられているのだから、子どもたちの行為が「学び」に向かっていなければならない。子どもたちの行為によって「学び」が生まれなければならない。それが、子どもたちの育ちにつながらなければならない。そしてそれは、教師が教えることでは生み出せないほどの学ぶ喜びをもたらすものにならなければならない。

もちろん、何人もの子どもがいるのが学校であり、それらの子ども一人ひとりが「学びの主人公」になるということは簡単なことではない。何もしないで子どもに任せればできるなどということでもない。子どもが「学びの主人公」になるためには、学び舎である学校がどういうものになっているか、教師がどう存在になるか、それらの条件が整わなければ、その兆しすら見えてこないだろう。

私が提唱する「学び合う学び」は、それが実現する条件の一つである。ともに学ぶ仲間たちとともに、気づきも、分からなさも、異なる考えも出し合い聴き合い突き合わせることによって、一人ひとりが「主人公」になる学びの扉を開くことができる。

人は一人で生きているのではない。たくさんの他者とともに生きている。学校には何人もの「学びの仲間たち」がいる。その環境が生きるような学び方ができれば、一人ではできないようなことができ、一人では考えつかないようなことが考えられ、考えと考えのつながりが大きな学びを生み出すこ

とになる。それが「学び合う学び」である。

「学び合う学び」は、子どもたちを「学びの主人公」にするために欠くことのできないものである。そして、それは、OECDの言う「生徒エージェンシー」とつながる、そう私は考えている。

2 子どもだけで生み出す学び

ここに、一つのビデオ映像がある。児童数百人にも満たない小規模小学校の一年生において撮影された算数の学びである。その映像は私が参観して撮影したものではない。

その学校を訪問したときのことである。私が学校に到着するやいなや、Y校長が「一年生のK先生の授業のとき、こんな素晴らしいことがあった！」と、その日の研究会の打ち合わせそっちのけで説明し始めたのである

その校長は私よりも信頼する校長である。その校長がこんなに興奮している。私は察した、その授業はY校長が心底感動させられたものなのだと。

Y校長は、撮影した映像をまじえながら授業の概略を話してくれた。見て聴いているうち、これはすごい、こんな目にしたら、しかも自分の学校の子どもがやってのけているんだから、校長として興奮するのは当然だ、そう思うと同時に、私自身も唸ってしまった。

私は、カバンの中のパソコンを取りだし、今、視聴したばかりの映像をコピーしてもらうよう懇願した。もう一度じっくり見たいと思ったからである。

担任のK先生が6人の子どもたちに配ったのは7色のおはじきの入ったビニール袋である。この学級は全員で6人。1年生なので通常はペアで学習しているが、この時は、課題の関係で6人いっしょに学ぶことにしたのだった。

その課題、それは、「たくさん入っているけど、どの色のおはじきが多い？ 数えないで分かるかなあ？」だった。

下の2枚の写真、①はK先生がビニール袋を渡したところである。「どちらが おおい」というこの題材は、教科書では、4種類のものがそれぞれ数個ずつで、それを比べることになっていた。しかし、K先生は、それでは易しすぎて学びにならないと判断し、もっと多くのおはじきで比べることにしたのだった。

机の上に盛り上げられたおはじきの山に手を突っ込みながら、子どもたちは「赤がいちばんきれい」、「2ばんは？」などと言いながら、自分の好きな色のおはじきを手にして楽しくてならないという顔をしている。そんなみんなに、「数えないと…」と“かほ”が言う。彼女は、今やらなければいけない

6人の座席／いずれも仮名		のん
りんか	まりん	
ゆみ	みか	
	かほ	



のはそういうことじゃないでしょと言ったのだ。でも先生から「数えないで」と言われている。そこで“りんか”が「じゃあさ、セットにしよ」とみんなに呼び掛け、その後、写真②のように、色別に分けて、それぞれの色のおはじきを山に盛ったのだった。見ていただいて分かるように、そこにK先生の姿はない。K先生は、子どもたちから少し離れていたのだ。それは、最初から子どもたちだけでやらせたいと考えておられたことを表している。

赤、橙、青、ピンク、黄、緑、白という7色のおはじきの山を前に、子どもたちが次々につぶやき、反応し合いながら、どの色が多いのかと考えていく。

「〇ちゃんが、緑、集めてる」	「こっち（橙）の方が多いんじゃない？」
「私、赤ね」	「ちゃんと置いて……」
「じゃ、私、黄色」（まずは1人1色ずつになる）	「どちらが多いかなあ？」
「あ〜、白がいちばん多いんじゃない？」	（順番を決めようとする）
「うそー」	「そいじゃあさ、手を挙げることにしよ」
「青がいちばん少ないね」	「緑だと思う人」（5人挙手）
「なんか、白と緑、おんなじみたい」	「白だと思う人」（1人挙手）
「ピンクは普通に多い」	「でも、赤がいちばんきれい」
「黄色は普通」	「きれいという問題じゃないでしょ」
「これ、こっちのほうが多いんじゃない？」	「触ると気持ちいい」
「じゃあ、緑、たぶん、いちばん多い」	「ほんとだ」

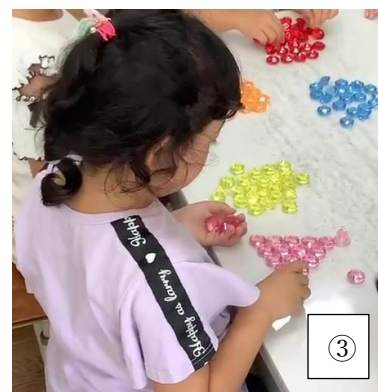
6人の考えは、緑と白に分かれている。さあ、この後、どうしていくか……、そのとき、いちばん手前に座っていた“ゆみ”が、ピンクのおはじきを三角形に並べ始めた。（写真③）

それを見た他の子どもが尋ねる「何をしてるの？」と。だけど、“ゆみ”は黙って三角形に形を整えるだけだ。

すると、それに感化されたのか、奥の席の“のん”が、赤のおはじきをハート形に並べ始める。

それを尻目に、“まりん”が音頭をとって、「緑が多いと思う人」と声を張り上げる。ハートに並べつつある“のん”を除いた5人が手を挙げる。そして、答えが出たとばかり、「せーのー」と言って、先生に向かって「緑！」と叫んだ。

ここで、これまで黙って見守っていたK先生が口を開いた。



「でも、今、まだ『思う』だけでしょ。じゃあ、どうやったら、絶対にこれが多いって言える？」

先生の言葉を受けて、“まりん”が、いいこと思いついたとばかり次のように言う。

「何かの形をつくって、見た目で見たら……」

「じゃ、いっしょの形つくらないと分からないんじゃない」

「じゃ、何の形がいい？」

ここで子どもたちから出てきたのは、魚、ハート、チューリップの3つ。その結果、“みか”が言いだした「魚」を作ることになる。

「こうやって……」 「(さっと魚の形にして) 3個余りました」 「隙間あるよ」 「分かった。隙間なくすね」 「黄色、4個残った」 「ピンク、2個残った」 「(緑) できたよ。10個余った」	「(赤に) それ、あまり0個だよ」 「(橙) 6個余った」 「小さいじゃん。もうちょっとでかくしなきゃ」 「3個の人、いないよね」 「ということは…… (いちばん多いのは)」 「(声を合わせて) 緑」 「8個余ったから」
---	---

写真④を見ていただいて分かるように、6人が作っている魚は、形も大きさも不揃いである。

ここで重要なことは、K先生が、この子どもたちの様子を黙って見ていたということである。これではどの色が多いかは決められない、でも、今は、子どもたちのしていることを止めないで、気づくまで待ってみよう、ということだったのだろう。教師のこの「待ち」がないと、「子どもがみつける学び」は芽を吹かない、子どもたちは、その教師の期待にこの後、応えることになる。

「(いちばん多いのは) 緑」と言ってから、みんなの魚をじっと見ていた“りんか”がつぶやいた。すると“かほ”もそれに続いた次のように。(写真⑤)

「形がちょっと違うね」

「うん、大きさ、同じくらいにしようか」

そんな2人の声に他の4人も続く。

「でも、どうやって同じくらいにするの？」 「(このままでは) 差ができるんじゃない？」 「やっぱりこの考え、無理！」 「数えてしょうか」 「数えちゃだめなんじゃない」 「じゃあ、どうするの？」	「(作った魚) 崩しちゃった」 「次はハートにしたら」 「一回ハートにしようか」 「一緒の形や大きさにすればいいんじゃない」 「セットにすればいいんじゃない？」
--	---

その時だった。“まりん”が声をあげた。

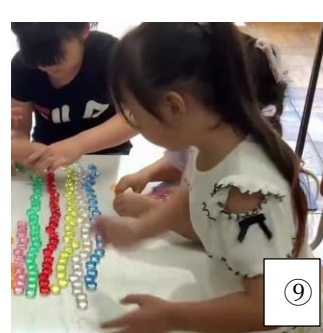
「そうだ！……これ、1個ずつ、ここに、どんどん置いていったらいいんじゃない」

写真⑥を見ていただいて分かるように、“まりん”は、青、白、



黄、赤の4個のおはじきを、横に並べている。彼女は、このように7つの色を横に並べて比べる方法を思いついたのだ。

こうして子どもたちは、写真⑦のように、7つの色のおはじきを、縦に一本の道のように並べ始めた。そのうち、写真⑧のように、並べ始めが揃っていない状態になっていることや、おはじきとおはじきの間に隙間ができていることに気づいた子どもが、「ずれてる」と言った。確かに白だけが手前に突き出ているし、青などに隙間が見られる。すると“りんか”が、「ずらさないよう、こうやって」と言いながら手でおはじきを押すような真似をする(写真⑨)。

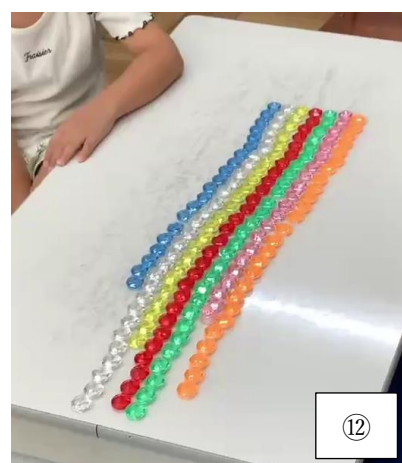


こうして7色のおはじきが写真⑩のようにまっすぐになってくる。そして完成。写真⑪は歓声を上げる子どもたち。



ここまで 25 分。何が素晴らしいか、言うまでもない。これは、子どもたちが、子どもたちだけで到達した学びなのだ。

写真⑫を見ていただきたい。これが、子どもだけで並び終えた7色のおはじきなのだ。青がいちばん少ないということは、最初に山に盛ったときから子どもたちは気づいていた。けれど、いちばん多い色は、ほぼ最後まで緑だと思い込んでいた。それが、このように並べることによって、白がいちばん多かったことが分かったのだった。その差はたったの1個だった。



もし、「25 分もかけず、最初からこのように並べさせたら分かったことではないか」とおっしゃる方がおられたら、「学ぶ」とはそういうことではなく、分からないこと、はっきりしないこと、曖昧なことを、こうではないか、ああではないかと考えることで生まれ深まると分かっていたいただきたいと思う。学びは、結果を早く出すことではなく、分かるまでの「過程」で生まれるものなのだ。その「過程」を辿ることで、これから出会うであろういろいろな「分からなさ」に向き合い取り組む意欲と態度を身につけていくのではないだろうか。

3 教師の「待ち」と「見守り」の大切さ

ここに紹介したような「子どもが子どもだけで生み出す学び」が実現するには、何が必要なのだろうか。皆さんにはそういう考え方をしてほしい。どのようにしたらそうすることができるだろうかという考え方はしないでもらいたい。方法では生まれないからである。やり方ではないからである。だから、私たち教師に、何が必要なのかと考えてもらいたいのだ。

K先生の授業を読んでいただいて感じていただいたと思うが、25分に及ぶ子どもたちの取り組みの間、先生が子どもたちに話したことはたったの2つだったという事実である。

私がこのことからもっとも強く感じたことが二つある。一つは、「子どもにやり切らせたい」というK先生の強い願いである。そして、もう一つは、「子どもは必ずみつけだす」という子どもへの信頼である。「願い」と「信頼」、言葉で言ってしまうえば二言だが、これは大きな大切なことである。

そして、K先生の25分間の姿にみられる教師の居方で、これこそ「子どもがみつけだす学び」を実現する根幹だと思ったのは、「待つ」ということと「見守る」ということである。

前述した「願い」と「信頼」ということと、「待つ」と「見守る」ということは、深くつながっている。願いがなければ、子どもを信じていなければ、待てないからである。

私は、学びは、学ぶ子どもの側に立たなければ見えてこないと考えているので、K先生のこの授業においても、6人の子どもの気持ちになってふり返ってみた。そうして思い出されたのは、この学びにおいて、子どもたちは二度、「どの色のおはじきが多いか」という結論を「せーのー」で叫んでいるが、考え合っているときは全く先生の方をふり向かなかったのに、そのときは先生に向かって、先生に聴いてもらうという気持ちで叫んでいたということだ。

それは、何を意味しているかだが、私が感じたのは、子どもたちは、K先生に見守られていることで安心して学んでいたということである。もし、K先生の存在がなかったらこのような学びは生まれなかったにちがいない。先生が子どもたちを信じているのと同じように、子どもたちもK先生のことを信頼していた。この教師と子どもの信頼関係のないところではこういう学びは生まれないのだ。

さらに、大切なことは、子どもに対する「願い」に基づいたことを、言葉だけでなく、本当に行なおうとしておられることである。当然のことだが、どんな教師でも、いつでも、どんな事柄に対しても、思った通りにできるものではない。K先生であっても、そういう失敗ともいえる授業をいくつもやってこられたに違いない。けれども、自らの信念を曲げることなく、やり続けておられる、しかも、その実践の根幹に、子どもたちにとって良い学びをつくりたいという願いがある、そんな先生と毎日暮らしている子どもたちが、教師の願いに応えないはずがない。

教師の仕事は、どこまでも、生きとし生ける教師が、今まさに生きている一人ひとりの子どもに対して、心を届け、心を繋げ、ともに人として育つために、ともに心と頭を砕く行為である。そういう意味では、授業は子どもと教師との共同作業なのだと思う。幸せな職業である。

「子どもがみつける学び」が実現するとき、教師は、自分が教師であることにもっとも喜びと幸せを感じるのではないだろうか。

「子どもがみつける学び」は素晴らしい！！